

## 蘇軾文学の成立と蘇氏一族：和陶詩を中心に

原田，愛

<https://hdl.handle.net/2324/1398288>

---

出版情報：九州大学，2013，博士（文学），課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏名・(本籍・国籍)	はらだ あい 原 田 愛 (福岡県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博甲第170号
学位授与の日付	平成25年8月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人文科学府 言語・文学専攻
学位論文題目	蘇軾文学の成立と蘇氏一族 —和陶詩を中心に—
論文調査委員	(主査) 教授 竹村 則行 (副査) 准教授 南澤 良彦 教授 柴田 篤 准教授 静永 健 教授 東 英寿

## 論 文 内 容 の 要 旨

宋代を代表する文人蘇軾が、その晩年に嶺南に流謫されたことによって六朝時代の隱逸詩人として名高い陶淵明への尊崇の念を深め、その詩篇百二十四首に和韻する「和陶詩」を創作したことは殊に有名であり、これらの詩群は蘇軾の人生の集大成とされてきた。但し、この和陶詩には、陶淵明という媒介を通して一門の結束を促す蘇軾の強い意志が表れており、その後の蘇氏一族はそれに応えたのであるが、そうした蘇軾の文学と蘇氏一族の関係性については、先行研究では論究されていない。よって、本論文は、序章・終章及び全六章における考察によって、現代に至るまで大きな影響力を有する蘇軾文学の成立と伝承の過程を、和陶詩及び蘇氏一族の編纂活動に焦点を当てて明らかにしようとするものである。

序章では、中国の文人における子孫の重要性に言及し、蘇氏一族の系譜や蘇軾の人生、現代に遺る詩文集とその影響力について概説した。その上で、蘇軾の文学がその偉大さ故に自然と流伝したものと見なされ、従来の研究では蘇氏一族の尽力が見逃されがちであったことを述べ、問題点を指摘した。

続く上篇は、まず蘇氏一族の行動原理を明らかにするために、蘇軾晩年の代表作「和陶詩」を取り上げた。まず、第一章では、陶淵明の人生やこれまで指摘されてきた和陶詩の特徴、先行研究の状況などを概説した。

その上で、第二章では、蘇軾とその実弟蘇轍の和陶詩を通じた交流と、蘇軾歿後の蘇轍の和陶詩を世に広めるための活動を論述した。蘇軾は、旧来の唱和詩・擬古詩とは性質を異にする「和陶詩」を創始したことを誇り、更に、和陶詩を媒介とする連帯感が、現実の同志である門人や一族の間に浸透し、後世に継承されることを望んだ。その遺志を受け継いだのが蘇轍であるが、蘇轍については従来の和陶詩研究ではあまり詳細な考察が為されていない。そこで、蘇轍が蘇軾の遺志をどのように継承し、それが如何にして後世の流行に繋がったのかを論証した。

第三章では、こうした蘇軾・蘇轍の思いが、特に蘇軾の末子蘇過によって継承されていく過程を考察した。晩年の蘇軾は、蘇轍との和陶詩交流を通して自らを鼓舞すると同時に、その絆の深さを子孫に示して連携を促した。蘇轍もその意を汲み、その兄弟関係を「孔子と顔回」に擬えつつ、和陶詩の継承を慫慂した。子孫の中で、そのような和陶詩の影響を最も強く受けたのが蘇過であり、彼は、蘇轍や姻戚の范氏一族の援助を得て、当時禁書とされた蘇軾の詩文を後世に伝承することに尽力した。これまで全く論究が無かった蘇軾「和陶詩」のこうした家訓的側面や蘇過の継承過程について、本論文では蘇軾・蘇轍・蘇過各自の和陶詩の内容を分析することで明らかにする。

下篇では、第四章において蘇過が晩年の蘇軾を如何に支え、その文学伝承に如何に寄与したかを

具体的に論じた。蘇軾が配所の嶺南・海外で後世に多大な影響を与えた詩文を多く著し、蘇過がそうした蘇軾の文業を支えたことについての考察は先行研究にも幾つか見られるが、蘇軾歿後の蘇過が、元祐党禁による政治的弾圧と不正流通に苦悩しながらも、蘇軾の詩文を収集し、大切に保管したことには全く注意が払われてこなかった。そこで、本論文において蘇軾の文学継承に人生を捧げた蘇過の功績を明らかにした。

第五章では、更に蘇過の孫にあたる蘇嶠・蘇峴兄弟が南宋初期に父祖の文集を出版した過程について、その背景とともに論じた。蘇嶠・蘇峴は北宋から南宋に移行する混乱期に蘇軾の詩文を死守し、晩年に外任した福建地方において、各々の出版事業を展開した。これは、孝宗朝初期に北宋末期に迫害されていた元祐党人の名誉が完全に回復し、その偉業の称揚が可能になったことに後押しされたものである。彼ら曾孫の出版は福建地方における蘇軾への関心を更に高めることになり、蘇軾詩文の注釈にも影響を及ぼしたのである。

第六章でも、南宋朝における蘇氏一族の出版活動の意義について更に論述するために、蘇軾を終生支えた蘇轍とその後裔の編纂活動について分析した。蘇轍の詩文自体が同時代から後世においてもさほど注目度が高くないために、それがどのような経緯で今日まで伝承されたのかについて従来総括的に論究されることは無かった。そこで、本論文では蘇轍文集が伝わった要因である蘇轍とその子孫による継続的な文集編纂の過程を考察し、同時に蘇軾文集の伝承との共通点・相違点を明らかにした。宋代の文人と子孫の文学継承の典型及び時代性を見る上でも重要な研究である。

終章では、蘇氏一族の中で受け継がれた父子間の「孝」と兄弟間の「悌」を重んじる精神の重要性を述べ、その精神こそが蘇軾文集が後世に継承される礎であったこと、日本や朝鮮半島など東アジアにも影響を及ぼしたことに言及しつつ、これまでの論をまとめた。

以上、本論文は、従来の研究蓄積が乏しかった蘇氏一族の関わり方について、「和陶詩」という蘇軾の代表作を中心に、その編纂活動と後世への影響を体系的に論じるものであり、蘇軾文学の新たな一面を照射するとともに、中国書籍出版史における宋代の特異性や、出版事業と宗族との関連性についても、新たな知見を提出するものである。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、晩年に嶺南に貶謫された北宋の蘇軾が東晋の陶淵明への傾倒を深め、全ての陶淵明詩に和韻した「和陶詩」124首について、その具体内容、詩作目的、編纂と伝承に関わった蘇氏一族や門弟たちについて解明し、更に蘇軾文集の成立と後世への伝承について考察したものである。

論文本篇は、上篇を「和陶詩」について、下篇を蘇軾文集の成立と継承について論述する。

上篇第一章は、蘇軾の「和陶詩」と蘇轍がそれに唱和した「和陶詩」について考察する。蘇軾は陶淵明に傾倒して「和陶詩」を詠んだが、その中で「和陶詩」による一族一門の結束を提唱した。その結果、実弟蘇轍、末子蘇過、更に一門の秦觀や晁補之等による「和陶詩」が続々と制作された。

上篇第二章は、蘇軾と蘇轍、蘇過及び蘇氏一族間における「和陶詩」による交流を分析し、「和陶詩」の家訓的意味について考察した。蘇軾や蘇轍、蘇過等の「和陶詩」についてはこれまで学界で系統立った論究がなく、この考察は論文の提出者による新たな研究成果である。

下篇第三章は、蘇軾文集の抄書と編纂に関わった蘇過の役割と功績について論述する。蘇軾文集は蘇軾が生前に編集した『東坡集』に加え、蘇軾の嶺南貶謫に随行した末子蘇過が抄書編纂した『東坡後集』が中核となって後世に伝承された。蘇軾歿後の元祐党禁による蘇軾詩文の発禁の渦中、常に蘇軾の身近にいた蘇過が、流通する蘇軾の贋作を除いて真作を収集し編纂した功績は大きい。

下篇第四章は、蘇過の孫（蘇軾の曾孫）にあたる蘇嶠・蘇峴兄弟が、実父蘇過や祖父蘇軾の文集を編集出版した経緯について解明する。兄弟は1127年の靖康の変に伴う南渡の際にも蘇軾詩文を死

守し、晩年に赴任した福建において父祖の文集を出版した。これには南宋孝宗初（1162年）における蘇軾文集の解禁や、当時の福建における出版の盛行が後押しした。

下篇第五章は、南宋期の蘇氏一族による蘇轍文集の編纂と出版活動について追究した。即ち長孫蘇籀による蘇轍『古史』、曾孫蘇詡および玄孫蘇森による蘇轍『欒城全集』の編纂と出版がそうである。蘇軾文集ほどには注目されなかった蘇轍文集の編纂と出版および伝承については、これまで学界で本格的な研究に乏しかったが、本研究はその空白を埋める貴重な成果である。

以上が本論文の概要である。所謂唐宋八大家に含まれる蘇軾や蘇轍に関する研究は、日本や中国を通してこれまで相当の蓄積があり、特に近年の宋代文学研究の進展は顕著なものがある。その中で、本論文の提出者は蘇軾の事跡を追って故郷の四川省や嶺南の海南島を自ら踏査したが、その情熱は本論文の研究成果に結晶した。即ち蘇氏一族や一門による「和陶詩」に着目した本格的な研究、蘇軾文集の編纂と出版に関する詳細な研究、更に蘇轍や蘇過の文学活動に注目した具体的な研究、これらは先行研究において皆無または手薄な分野であり、その論述にはなお生硬な表現が残るが、本論文が従来 of 蘇軾文学研究を一步進め、中国文学史上の空白部を補填した価値は評価できる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであることを認める。